いずみさの昔と今 第299回

「中世から近世へ②」

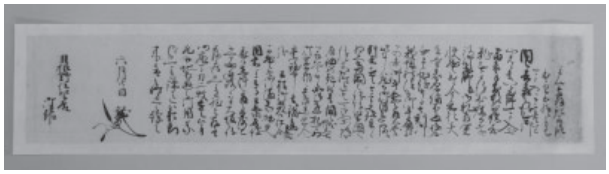
幾度もの戦乱が起こった和泉地域では、武士たちや寺社勢力だけではなく、農民たちも自らの身を守るため、時には武器を手に立ち上がり、またある時は山へ逃げ込み対抗しました。日根荘の農民たちは、応仁の乱の後、和泉国の国人衆（在地の有力な領主）が結集した「惣国」一揆のもとで百姓たちは「私徳政」（実力による債務破棄、土地返還）を行うなど九条家の支配に対して対抗したり、揺さぶったりしました。この国人衆や村人らで構成された和泉惣国は、文明17（1485）年10月、和泉国両守護の細川氏により堺で鎮圧され、再び幕府の守護権力によって和泉国が支配されることになります。鎮圧のちに作成された和泉守護被官の交代勤務名簿である「六日番交名」には樫井源六、靏原藤右衛門尉、古屋与次といった日根野、樫井、鶴原に拠点を置いたと思われる領主の名前が記載されており、日根郡の国人が細川氏の支配下に入っていたことがわかります。細川氏は、再び惣国一揆が起きないように注意しながら、和泉国の武士たちを自身の一国支配体制へ組み込もうとしたと思われます。

さて、和泉守護による一国支配体制が続くかのようにみえた和泉国は、翌文明18（1486）年の紀伊根来寺が和泉へ侵攻したことにより再び戦火に見舞われます。

根来寺は平安末期に高野山の一院として成立した真言寺院であり、鎌倉時代には紀伊岩出へ移り、地域住民と深い関係を築くことで泉南・紀北で大きな影響力を保持しました。この根来寺は、上記のような戦国期には、紀伊では守護畠山氏に与する存在として軍事力の基盤となり、和泉では幕府体制に組み込まれた公的支配権力と、地域により異なる立場で権力を保有していました。その後も三好氏による畿内掌握や和泉における国衆と呼ばれる在地の勢力らが登場するなかで、根来寺は勢力を維持しつづけました。

永禄7（1564）年7月、畿内で三好政権を維持していた三好長慶が没します。これにより畿内を抑えていた三好権力が三好三人衆と松永久秀に分裂し（最近大河ドラマで取り上げられています）、再び雲行きが怪しくなります。三好政権下での根来寺は、永禄年間には畠山方として三好政権に対抗、佐野では松浦氏の被官となった佐野周辺の領主たちと関係を維持し、日根郡の根来寺領有をすすめていきます。織田信長の上洛以後は将軍義昭政権に和泉の国人領主や根来寺は従うようになります。

織田政権期の根来寺は、全体としては信長に従い、和泉の地域支配を承認されていました。しかし、全面的に服従しているわけではなく、根来寺と本願寺との繋がりを介して織田政権に敵対する可能性があったことも確かでした。そして天正10（1582）年、明智光秀を討ち、織田家家中で発言力を高めた豊臣秀吉が、和泉国内の根来寺の知行について紛争がある、と口出しし、根来寺との関係は決定的に悪化します。次回は天正13年の根来攻めの泉佐野と秀吉政権下の泉佐野について概略します。



▶天正4年頃、本領回復（日根野村）をのぞんだ松浦氏被官の日根野孫次郎へ宛てた日根野弘就書状

レイクアルスタープラザ・カワサキ歴史館いずみさの
☎469-7140 Fax469-7141
休館日　月曜日、祝日（祝日が月曜日の場合は月曜日と火曜日が休館）
開館時間
午前9時～午後5時
（入館は午後4時30分まで）
入館料　無料

日本遺産・中世日根荘を巡る⑯

～絵図編（15）「慈眼院」～

JAPAN HERITAGE
日本遺産

「日本遺産」に認定された「旅引付と二枚の絵図が伝えるまち ―中世日根荘の風景―」のストーリーを構成する泉佐野市の文化財等を紹介します。

問合先　文化財保護課

◀日根野村絵図に記された「無辺光院」

▼慈眼院 多宝塔

「日根野村荒野開発絵図」の中央に描かれた「無辺光院」は、日根荘の荘園政所として九条政基が最初に入った寺院で、現在の慈眼院（元大井関神社中之坊）とする説もあります。天武天皇の勅願寺として白鳳2（674）年に開創されたと伝わり、隣接する日根神社（大井関大明神）の神宮寺として数多くの堂宇が立ち並ぶ見事な伽藍を誇っていましたが、天正13（1585）年に豊臣秀吉の紀州攻めの兵火により焼失しました。その後、豊臣秀頼により再建されましたが、当初からの建造物はわずかに多宝塔、金堂が残るだけとなっています。創建時は井関山願成就寺寿福院と称し、大井関御坊とも呼ばれました。現在の寺号は江戸時代に京都仁和寺門跡より九条政基の院号の「慈眼院」の名を授けられ、真言宗御室派仁和寺の末寺となりました。

多宝塔は文永8（1271）年に建立された本市唯一の国宝建築物で、石山寺（滋賀県）、高野山金剛三昧院（和歌山県）とともに日本の多宝塔三名塔に数えられています。内陣の須弥壇の上に大日如来座像と脇侍の持国天、多聞天を安置しています。明治修理の際、金堂（重要文化財）横から現在の場所に移転しています。

※絵図の写真は、歴史館いずみさの所蔵の複製を使用（原本は宮内庁書陵部所蔵）